

12月



あの日のあの川 リレー日記 ～第47話～



あの日のあの川
リレーDiary

みなさんはどの川でどんなことをした記憶がありますか？ 幼少期や青春時代に体験した川での記憶を日記として掘り起こして語るコーナーです。リレー形式で毎回次の人にバトンをつなぎます。

第47話主人公 丸山陽久 (筑波大学 白川(直) 研究室『川と人』ゼミ)

(□川ガール・■川系男子)
(出身地を流れる川：愛知県乙川)

「青春」

いつのこと？： 幼少時代から高校時代まで

どの川？： 乙川

大学進学のために地元・愛知県を離れて早3年半。入学当初に感じていたホームシックを感じることは滅多に無いが、たまには地元が恋しくなるときもある。そんなとき、地元の景色として真っ先に思い浮かぶのは桜で埋め尽くされた乙川の景色だ。

愛知県中部に位置する岡崎市。その市の中心部を流れるのが乙川だ。徳川家康生誕の地として名高い岡崎城の麓を流れるこの川と共に、私は成長してきた。

幼少時代、私にとって乙川は特別な場所であった。自宅から車で20分ほど掛かるその川はお祭り等の時に

しか行く機会がなかった。人々で溢れ、華やかなその場所は私を少し背伸びした気分させてくれた。毎春には河川敷が桜で埋め尽くされ、家族 5 人で連れ立って満開の河川敷を散歩した。兄貴達と河川敷の縁でふざけあって両親に怒られた。屋台で好きなものを買ってもらえずに泣き喚いた。こんな桜祭りも時が経つにつれて兄達は友人と行くようになり、家族揃って出掛けることもなくなった。両親と 3 人の桜まつりは少し寂しくもあったが、これが成長するということかと子供ながらに感じたのを覚えている。

小学生も高学年になると乙川は私にとって少し身近な場所となった。自転車を手に入れ、行動範囲の広がった私は週末になると意味もなく友達と乙川まで出かけた。河川敷で遊ぶこともあれば意味もなく川沿いを遡って源流探しに出掛けたこともある。特に、中学 1 年生の夏は私にとって忘れられないものとなっている。今までは家族と行っていた花火大会に友達だけで行ったのだ。心配そうに見送った母親が少し多めにくれたお小遣いを手に、河川敷でもみくちやになりながら友達とみた花火と屋台の匂いは今でも鮮明に覚えている。また、陸上競技に取り組んでいた私にとって乙川は「走り初め」の地でもあった。毎年 1 月 3 日に行われていたマラソン大会では「今年こそはいい走りを！」の思いとともに走った。

高校生になると乙川の近隣の高校に進学した私にとって、乙川は日常になった。自転車の上から毎日見る乙川の景色は私に季節の移ろいを教えてくれた。季節によって川面の表情が異なるのだということを私はこの時初めて知った。また、川が恐ろしいものであるということも乙川から学んだ。平成 25 年台風第 18 号で乙川は大幅に増水し、河川敷までもが濁流に飲み込まれた。水が引いた後に瓦礫まみれになった河川敷の景色には大変なショックを受けた。補講から抜け出して友達と河川敷でおにぎりを食べ、くだらないことを言い合いながら友達と河川敷を自転車で駆けながら帰宅した。受験期には近くの図書館から息抜きに乙川を訪れ、川の流れを見つめた。このように私にとって乙川は当たり前存在となった。

そんな乙川も大学進学以降ほとんど訪れていない。現在乙川周辺では再開発事業が進行しており、ここ数年で大きく様変わりしたそうだ。今でも帰省する際の電車の車窓から乙川が見える。変わっていく川の周囲と変わらない川の流れを見るたびに、地元を出て自分も少しぐらいは成長したろうかと自問自答する。そして、成長を手伝ってくれた故郷と家族に対する感謝の念を抱くに至る。寒い冬があげると乙川の河川敷が例年通り桜で埋め尽くされるだろう。今度帰省した際には感謝の気持ちを込めて両親に言ってみよう。「乙川に桜見に行こうよ」と。

(次は 2 月号にて藤田直樹さんにバトンを託します)

■ 連載『あの日のあの川 リレー日記』のバックナンバーは JRRN ホームページの以下のページよりご覧いただけます！

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/category/riverdiary>